

秋のたより

発行 我孫子市民図書館
〒270-1147
我孫子市若松26-4
電話04-7184-1110



我孫子市制45周年！！

今年で我孫子市は市制45周年を迎えます。45年前の我孫子はどのような様子だったのでしょか。

秋のたよりの一面では、我孫子市民図書館が所蔵する資料から探し出した当時の写真と、我孫子の歴史を調べるための基本的な資料をご紹介します。



昭和45年当時の街の風景
(国道356号線緑付近)
『あびこ 市制施行記念1970』より

人口

男

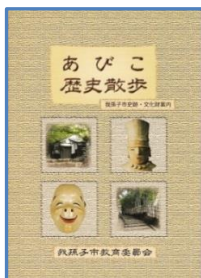
女

世帯数

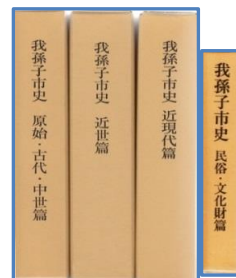


昭和45年	40,630 人	19,194 人	19,756 人	10,154 世帯
平成27年	133,044 人	65,547 人	67,497 人	56,845 世帯

<我孫子の歴史や史跡を調べるには・・・>



『あびこ歴史散歩』
我孫子市教育委員会/編



『我孫子市史』
原始・古代・中世篇
近世篇
近現代篇
民俗・文化財篇
我孫子市教育委員会/編



『ふるさとあびこ』
中村 脩/著
湖畔情報社

これ以外にもまだまだありますので、ぜひ、図書館の郷土資料コーナーをお訪ねください。またテーマ別に紹介した冊子もご用意しています。



『我孫子を調べる』

守り人シリーズ

偕成社
上橋菜穂子／著



『精霊の守り人』

武人の国カンバル王国に生まれた娘バルサは、6歳のとき父カルナが殺され、父の親友で短槍使いのジグロと国外へ逃亡することになった。

逃亡生活の中、ジグロに武人として鍛え上げられるバルサ。呪術師トロガイやタンダの元に身を寄せながらも各地を転々とするが、ジグロはバルサが24歳のとき病死してしまう。その後も一流の用心棒や護衛として過ごしていたある日、新ヨゴ皇国の皇子チャグムの母から依頼され、チャグムの用心棒を努めることとなる。チャグムは実父である帝から命を狙われているのだった。

これが守り人シリーズの二大主人公バルサとチャグムの出会いとなる。様々な人びとの運命が交錯する物語が始まる。

☆主な登場人物紹介☆

○バルサ

カンバル王国出身の女用心棒。父の親友で短槍の達人ジグロに育てられ、腕のよい短槍使いとなる。

新ヨゴ皇国皇子チャグムの用心棒をしたことで運命の流れが大きく変わることとなる。



『闇の守り人』

○ジグロ

カンバル王国出身でバルサの養い親。天才的な短槍使い。陰謀に巻き込まれた親友カルナに頼まれ、その娘バルサとともに逃亡生活を余儀なくされた。バルサを武人として育てあげるも自国に戻れぬまま病死する。



『流れ行く者』

○チャグム

新ヨゴ皇国皇子でありながら、帝である実父に命を狙われている。幾度も危機にさらされ、バルサに救われて乗り越えていく中でたくましく成長していく。



『虚空の旅人』



『蒼路の旅人』

○タンダ

バルサが逃亡中に身を寄せていたトロガイの弟子でバルサの幼なじみ。

トロガイに呪術を習う薬草師。料理が上手く、過酷な用心棒の仕事から戻ってくるバルサに温かい料理と安心をもたらす。

○シュガ

新ヨゴ皇国の星読博士。聖導師見習いでチャグムの教育係。

チャグムが宮の中で心を許せる数少ない相手。トロガイから呪術を学んでいる。

○トロガイ

当代最高といわれている女呪術師。年齢不詳。タンダの師匠。

新ヨゴ皇国ができる前に住んでいたヤクーの人である。

『守り人のすべて』偕成社 守り人シリーズ完全ガイド

バルサとタンダのエピソード、書き下ろしの短編『春の光』が収録されています。



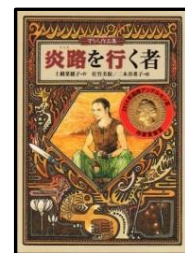
『夢の守り人』



『神の守り人』



『天と地の守り人』



『炎路を行く者』

偕成社守り人シリーズの紹介

- 『精霊の守り人』
- 『闇の守り人』
- 『夢の守り人』
- 『虚空の旅人』
- 『神の守り人』〈来訪編〉
- 『神の守り人』〈帰還編〉
- 『蒼路の旅人』
- 『天と地の守り人』第1部〈ロタ王国編〉
- 『天と地の守り人』第2部〈カンバル王国編〉
- 『天と地の守り人』第3部〈新ヨゴ皇国編〉
- 『流れ行く者』守り人短編集
- 『炎路を行く者』守り人作品集

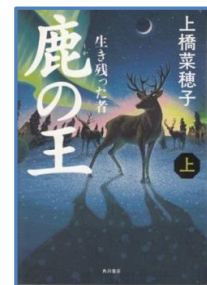
守り人シリーズは、物語に関連性があるため、上記の順番でお読みになることをお勧めします。※1～11は、新潮社から文庫版も出版されています。

『鹿の王』 KADOKAWA 上橋菜穂子／著

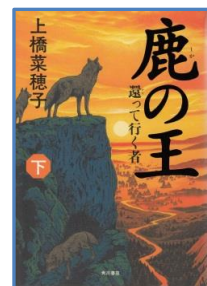
主人公はヴァンとホッサルという二人の男。ある夜、ヴァンが奴隷として囚われている岩塩鉱は、一群の不思議な犬たちによって襲撃を受け、謎の病が発生する。同じ頃、天才的な医術師のホッサルは領内に拡がる病の治療法を見つけるために奔走。様々な背景をもった登場人物が複雑に絡み合いながら、物語はスピーディーに展開していく。

物語の本筋から少しはずれますが、上橋さんの作品には思わず食欲をそそられる食べ物が頻りに登場します。『鹿の王』の中でも、たくさんの食べ物が描かれており、読んでいただけでお腹がすいてしまいます。物語の前半部分で、主人公ヴァンが水瓶から柄杓で水をすくって飲む場面がありますが、上橋さんの手にかかる、水でさえも信じられないほど美味しいものを感じられます。

『鹿の王』は2014年に出版されました。2015年には本屋大賞受賞と同時に第4回日本医療小説大賞にも輝いています。あとがきで、上橋さんはこの作品を書き上げるために徹底的な医学監修を受けたと書いており、医学に関する緻密な取材が物語の根幹を支えています。異世界ファンタジー小説にもかかわらず、物語にリアリティを感じるのはそのためかもしれません。



『鹿の王 上』



『鹿の王 下』

上橋菜穂子さん特集

○プロフィール

1962年東京生まれ、我孫子市在住。
児童文学作家、ファンタジー・SF作家で文化人類学者。
川村学園女子大学特任教授
日本児童文学者協会会員



○主な受賞歴

日本児童文学者協会新人賞(1992年)
『月の森に、カミよ眠れ』
野間児童文芸新人賞(1996年)
『精霊の守り人』
日本児童文学者協会賞(2000年)
『闇の守り人』
国際アンデルセン賞作家賞(2014年)
本屋大賞(2015年)『鹿の王』

獣の奏者シリーズ 講談社 上橋菜穂子／著

騎獣“鬪蛇”を育てる村に生まれた少女エリン。幼くして母を奪われ村から離れることになったエリンは、養い親の蜂飼いのもとでさまざまな生き物とふれあい、生き物の不思議に魅了される。そして、エリンは国の象徴とされる“王獣”と出会う。この出会いが、エリンの道を大きく動かすことになる。

物語の中には前触れなく親から引き離された子が多く登場する。主人公のエリン、王獣のこどもリラン、そして王族の子として例外ではない。親から次の世代へと引き継がれていくはずの物語が断絶するなかで、残された子どもたちはそれぞれ自分で選択し、新たに歴史を紡いでゆく。選択の結果がどんなものでも受け止めようとする姿に心が打たれる。

シリーズは全5巻。1、2巻で一度完結し、3、4巻はエリンが母となつてからの話になる。また、外伝では本編にはでてこない恋の話が描かれる。エリンの成長にあわせて語られているので、こどもから大人まで幅広い世代が入りやすい。ぜひエリンと一緒に、甘辛い肉を味わい、王獣の背中にしがみつき、幼子の肌のあたたかさを感じながら、彼女の物語を見届けてほしい。



『獣の奏者』
2 王獣編

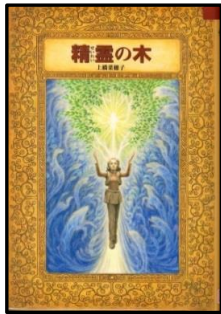
上橋菜穂子さんのその他の作品

上橋さんは短編小説やエッセイなどたくさんの物語を書いています。ここでは、そのいくつかをご紹介します。

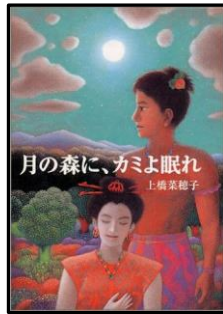
〈短編〉

守り人シリーズ、獣の奏者、鹿の王などの長編作品が注目される上橋さんですが、素晴らしい短編作品も数多くあります。「普段本をあまり読まない」「長編作品を読み切る自信がない」そんな方にこそ、手軽に読める短編作品をおススメします。

上橋作品のエッセンスがぎっしりとつまったこれらの作品から読みはじめてみてはいかがでしょうか。



『精霊の木』
上橋菜穂子/著
偕成社
デビュー作



『月の森に、カミよ眠れ』
上橋菜穂子/著
偕成社
日本児童文学者協会新人賞



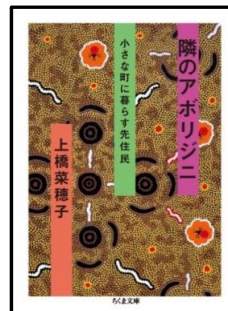
『狐笛のかなた』
上橋菜穂子/著
理論社
野間児童文芸賞

〈エッセイ〉

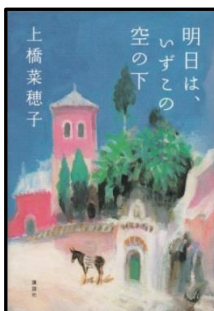
作家であると同時に文化人類学者でもある上橋さん。海外でのフィールドワークや生活体験を綴ったエッセイは、小説とはまた異なる魅力に溢れています。行間からにじみ出る上橋さんのチャーミングな人柄と異国の地で力強く活動する姿は、作品の登場人物以上に読者を惹きつけます。



『物語ること、生きること』
上橋菜穂子/著
講談社



『隣のアボリジニ』
上橋菜穂子/著
筑摩書房



『明日は、いずこの空の下』
上橋菜穂子/著
講談社

あとがき【我孫子にて】

上橋さんの作品のあとがきには、「我孫子にて」と書かれていることがあります。その理由として、「何とも言えない明るい暖かい感じがしたんです。この中で書いた本ですよということを残しておきたかったです。」と、おっしゃっています。自然豊かな我孫子の風土が、上橋さんをひきつけているのかもしれない。